

第二部門 へ子どもの育成に関する論文・実践記録またはエッセイ 入選論文

言葉を育むために

―知的障害のある中学生への指導実践報告―

宮下直子

# みやした なおこ さん

## [略歴]

- 年 齢 45歳
- 住 所 宮城県柴田郡柴田町在住
- 略 歴 北海道恵庭市出身  
藤女子短期大学を卒業後、宮城学院女子大学日本文学科に編入し、卒業。その後、宮城教育大学特殊教育特別専攻科言語障害教育専攻修了。  
川崎市立橘中学校、大河原町立大河原中学校、白石市立福岡中学校、宮城県立角田支援学校白石校を経て2023年4月に角田支援学校着任。中高国語1種、ろう学校1種の免許状、司書教諭の資格を所持。宮沢賢治学会イーハトーブセンター会員。
- 著 作 「石川淳『山桜』論」(宮城学院女子大学日本文学会、『日本文学ノート』第37号、15-28頁、2002年1月)  
「自立活動の時間の指導を日常生活に生かす試み」(日本障害児教育実践学会誌、『障害児教育学研究』第12巻・第1・2号、27-36頁、2008年)  
「作文でことばを育てる」(川崎市立中学校教育研究会 特別支援学級教育部会、『平成二三年度指導事例集』、2012年)

## [応募動機及びコメント]

藤女子短期大学で宮沢賢治を学び、それを機に宮沢賢治学会に入会して以来、賢治に興味を持っております。そのご縁で、暁烏敏賞を知りました。教員になるとは夢にも思わずに、学ぶことをただ楽しんで学生時代を送りましたが、宮城教育大学の専攻科でコミュニケーションの重要性について教えてくださった恩師のお教えをもとに、教職に就き無我夢中で実践してきました。

今まで出会った子どもたちから、いつも教えてもらってばかりなので、この素晴らしい暁烏敏賞は、子どもたちへのお礼になればと思っています。私は障害のある子どもから言葉を引き出すのが使命であると心得ています。今後も、一人でも多くの子どもたちと楽しくお話ししていきたいと考えています。

## 〔梗概〕

本稿は、特別支援教育に十四年間、取り組み、現在も携わっている筆者が、障害のある中学生に、言葉（ここではコミュニケーションに用いるための音声言語のみならず、書き言葉や内言、手話等を含む）を獲得させる方法を考え、実践してきたことについての報告である。特別支援教育における言葉の指導が進んでいないと感じたことから、自立活動や国語教育によって言葉を育む方法の一例をまとめるに至った。

言葉は、全活動で育てていくものだから、範囲が広すぎて捉えどころがない、という考え方もあろう。しかし筆者はあえて意識的に、毎日少しずつ粘り強く、自立活動や国語教育、あるいは生徒との日常会話に取り組むことで、障害のある子どもは言葉を育てることができると考える。そのように考えるに至った実践の成果を時系列に四件記し、考察を加えた。

四件の事例から言えることは、生徒それぞれの伝えたい思いを的確に把握し、それぞれの課題に即した支援を日常的に繰り返し行うことが大切である、ということだ。思いに寄り添うことで、意欲と自信が生まれる。すべての例でそのことが実証された。そして、どの子もコミュニケーションを欲している、ということが明確になった。だからこそ、生徒たちは言葉の学習に対して非常に意欲的であり、意欲的だから伸びる。伸ばす際の支援において重要なのは、できる限り多くの言葉を入力することだ。生徒の得意なこと、好きなことを生かし、生徒に合った手段で入力する。出力するのに十分な言葉が入力されれば、生徒は自ら発信するようになる。そして成功体験を積み重ねると、称賛される喜びを味わうことができるので、さらに意欲的になり、また伸びる。教員は、このような前向きならせん構造を意図的に作り出すことが望ましい。中学校を卒業すると、言葉の教育を受ける機会が激減してしまうのが現状である。ゆえに筆者は、義務教育の最後の三年間で、できる限り効率よく生徒に

言葉を入力し、しかも出力できるようにしたい、と考え続けている。

## 一 はじめに

特別支援教育に携わって十四年、決して長いとは言えない筆者の経歴の中で、強く思ったことがある。それは、特別支援教育（特に中学部段階）において、言葉（ここではコミュニケーションに用いるための音声言語のみならず、書き言葉や内言、手話等を含む）を育てる教育が不十分であるということだ。

私は二〇一二年に「作文でことばを育てる」と題して発表したことがある。その際に先行研究を調べたときに、教育現場ですぐに実施できる成果物は見つけられなかった。今回、この文章を書くにあたり、再び先行研究を調べたが、学習指導要領に即した国語の授業実践研究などがあるものの、日常の中で活用できる言葉を増やしたり、コミュニケーション力を育成したりするのに参考になる研究は見当たらなかった。人として豊かに幸福に生活するために必要な言葉を育むことは、もっとも重要視されてよいと私は考える。その点についての研究が進んでいないのではないか。

もちろん、言葉は全活動で育てていくものだから、範囲が広すぎて捉えどころがない、という主張もあるだろう。しかし私はあえて意識的に指導にあたることで、短期間に多くの言葉を生徒に入学したいと考えた。生徒が言葉を使えるようになったと判断するのは、生徒からの自発的な出力によってである。出力できるようにするためには、それ以上の入力が必要だ。特に知的障害のある子どもは、言葉を読んだり聞いたりして入力する機能が弱い。ということは必然的に出力も弱いことになる。しかし私は、毎日少しずつ粘り強く、自立活動や国語教育に取り組むことで、また生徒との日常会話を積極的に行うことで、障害のある子どもの言葉を育てることができると考えている。そのように考えるに至った実践の成果をここに報告したい。

本稿では、特別支援教育において言葉の指導に取り組んだ私の実践を

時系列に報告する。なお、私は公立学校の勤務経験しかないので、本稿における事例はすべて公立学校におけるものである。

## 二 実践事例（一）

二〇一〇年四月から二〇一二年三月まで担当した生徒Aは、自閉スペクトラム症で、小学校の特別支援学級を経て、中学校の特別支援学級に在籍し、特別支援学校の高等部へ進学した。私が初めて中学校の三年間を通して担当できた生徒のうちの一人である。

詳細は「作文で言葉を育てる」（二〇一二年、宮下）に譲るが、作文を書くことで、明らかに言葉が増えた。Aには聴覚過敏があり、人数の多い、にぎやかな生徒がいる教室で過ごすのが苦手だった。特に始業前の朝は、登校して鞆を置くとすぐに廊下に逃げ出し、耳をふさいでしゃがんでいた。そのころ頻繁に発言していたのが「上のテレビは地デジ？」である。各教室に配置しているテレビが、地上デジタル放送に切り替わったかどうかを確認する質問である。この一言を、とにかくあらゆる人に言っただけで済ませた。当時は気づかなかったが、Aは多くの人とコミュニケーションしたくてたまらなかったのだ。もっと自分の気持ちをみんなに伝えたい。そういう思いの表れである。しかし、自分の今の気持ちにぴったりで、しかも誰にでも伝わりやすい言葉を知らないから、なんとかして通じ合いたい思いを、その一言に込めていた。その後、多くの子どもと出会って経験を積むうちに、やっと気づいたのだが、彼らは疑問文で話しかけてくることが多い。なぜなら教員は、質問には必ず答えてくれるからだ。そこで自然と双方のやりとりが生まれる。その教員が、彼らの発信を受けとめる力がどんなに弱くとも、質問でなら双方になる、ということを知っているのだ。

自分の気持ちを適切な言葉で伝えられるようになってほしいと願いながら、私はAと、自分の体験や思いを言葉で綴る作文を書き続けた。文

章を書く前段階の素材収集のために用意した書式は非常に簡易なもので、長期休業中の記録を行うことを主眼としていたため、「〇月〇日の日記」とした。質問項目として「食べた物・行った場所・だれと?・どのように?・楽しかったこと・勉強したこと・お手伝い・どんな一日?」のみ提示した。もちろん、毎日すべての項目が埋まらなくてもよい。どんな子でも食事を行うので、一番はじめに食べ物の項を置いた。さらに、担当していた生徒四人、全員の作文が完成したところで、お互いに発表する機会を設けた。みな堂々と発表し、お互いに思いやる気持ちを育てることができたと思う。

Aが二年生の十一月ごろ、私はAの卒業を意識するようになった。隣で三年生が進学に向けて、入試のための学習を始めたからだ。私は、Aに急いでたくさんのことを身に付けさせなくてはならないと焦った。その気持ちがAに伝わったのだろう。ある日、数学で分数を学習しているとき、「違う違う、」と苛立つ私に、Aが非常に優しい声で、「ゆっくり、やさしくね。」と言ったのだ。Aが作文の時間以外に、しかも聞かれたわけでもないのに、自分の意思を言葉で発信したのは初めてだった。作文指導の成果がこのような形で返ってきたことに、私は感動した。それと同時に、Aから私への「指導」だと感じた。この一言は、私の一番大切な指針となった。つまり、どんなにその子のためを思って指導していたとしても、学ぶ速度や内容が、その子にじっくり合っていなければ力は伸びない、意味がない、ということを教えられた。

さらに三年生になったとき。Aはパニックが収まり、十分に落ち着いていると判断されたことから、交流学級で毎日、弁当を食べるようにになった。担任の私は教室まで送迎し、あとは交流学級の担任と生徒にまかせて、交流を楽しんでもらった。ある日、やんちゃそうな、体の大きな男子生徒が、挨拶の前に、みんなより早く弁当を食べていた。するとそこを通りかかったAが、「まだ、お弁当の時間ではありませんよ。」と、優

しいけれども、正面からはっきり言ったのだ。いかにもやんちゃそうな生徒であったため、Aが危害を受けるかもしれない、と私は身構えた。しかし、男子生徒は照れ臭そうに弁当をしまっただけだった。Aは、頻繁にはないけれども、自分から他者にむけて思いを発信できるようになったことが分かる。また、担任だけではなく、友達にも発信できるようになったことは、大きな成長であろう。このように、自分から適切な言葉を話すことに自信を持ったAは、同じ質問を繰り返すことがなくなった。

耳をふさぎ無言でいたAは、質問することで他者とのコミュニケーションを求めていた。そのAが作文を通して体験や思いを言葉で表現し、それを発表する経験を繰り返すことによつて、自分の考えや思いを相手に伝える言葉を獲得するに至った。それとともに落ち着いて他者と向き合えるようになった。この事例からは、言葉でのコミュニケーションが進むと、心理的に安定し、さらに学習効果が高まることがわかる。

実際にはAの他、三名とともに、二年間、作文によつて言葉を育む取り組みを行った。その全員に同様の成果が見られたため、私は今後も取り組みを継続しようと考えていた。

### 三 実践事例(2)

Aとの学習の後、私は中学校の通常学級の担任、特別支援教育コーディネーター、通級担当などを経て、二〇二〇年四月から特別支援学校に勤務するようになった。生徒Bの担当として、二〇二一年四月から二〇二三年三月まで、中学部二年から卒業までの二年間、指導に当たった。

Bは重い知的障害があり、小学部一年生から特別支援学校に通っている生徒である。二〇二一年四月に引き継いだ際には自分の名前も書けず、自分から発信することはほとんどない状態だった。そして周囲への注意



も散漫で、視野が狭かった。体の使い方にぎこちなさはあるものの、走ることは得意である。そのような状態から、二年間、毎朝一〇分間と一週間に一度の自立活動の時間に、言葉を育むための自立活動に取り組んだ。Aと行ったような作文指導は、すぐには取り組めないと判断し、その前に身に付けてほしい力を効率よく育成できるようにと考えた自立活動である。

第一に、署名ができるようになってほしいと思ったので、自分の名前を書くことに力を注いだ。なぞり書きがなんとかできるところから、一文字ずつ視写できるようにして毎日、名刺大のカード入れに手本を入れて、いつでも見られるようにして毎日、何度も書くことで、何も見なくても署名ができるようになった。書字についてはその後、好きな食べ物や好きな活動を手掛かりとして、イラストも添えて練習を重ねた。完全に文字だけで読めるようになったとは言い難いものの、文字を読もう、書こうとする意欲は見られた。

第二に、発音が不明瞭な場合が見られたので、相手に伝わりやすくするために手話を付けることを心掛けた。はじめは自分の名前を教えた。そして数字の指文字、曜日、というように、毎日使う言葉に手話を付けることで、自分から発信できないか、と考えていた。音声言語では発信できずとも、手や指を出してくれたら、と思っていた。

第三に、毎日、帰りの会で発表する、一日の振り返りを、一人でできるように頑張ってほしいと考えた。「今日、私が一番頑張ったことは〇〇です。楽しかったことは〇〇です。」と型を決め、空白の部分を教員がAから聞き取って書き、それを下敷きにして、なぞり書きができるようにした。発表する際には、教員が隣で一緒に手話を付けて行うようにした。これを半年ほど続けたところ、なぞり書きではなく視写できるようになり、手話を付けて一人で発表できるようになった。

翌年は、時間割を自分で言えるようになってほしいと考えた。朝の会

で「今日の予定」を発表する係を割り当て、毎朝、手話付きで言えるように練習した。文字にイラストを付け、さらに一緒に手話も付けながら発音した。こちらも半年ほどで、一人でできるようになった。そればかりか、天気を考えて、屋外でのマラソンができるか、できないかを自分で判断して言い換えることもできるようになった。

卒業するころには、教員からの質問に答えるだけでなく、自分から「太鼓、楽しかった!」とうっとりするように、その日に楽しかったことを言うようになった。また、「明日、調理か。」というように、翌日の楽しみな予定について、自分で言いながら確認する様子も見られた。さらに、友達同士で「〇〇さん、元気?」などと、「元気」という手話を付けながら、会話することもできるようになってきた。

全校集会の際に、教員が陰で手伝いながらも、人前での発表を成功させ、称賛されるという経験を何度か積み、人と通じ合う経験を毎日積み上げることで、彼女は自分の言葉に自信を持つことができた。話し言葉だけではなく、手話も付けることで、さらに通じやすいことも理解し、楽しみながら手話で表現する様子も見られた。すると自然と顔が前を向き、視野が広がり、表情が柔らかくなった。いつでも生き生きと活動できる人になって、高等部へ進学していった。

この事例においては、署名できるようになったことをきっかけに、氏名に使われている平仮名や、好きな食べ物などを手掛かりとして文字を学び始めたことが、本人の大きな自信になったと考える。また、手話を取り入れることで、言葉を文字だけではなく、動きとともに学ぶことになり、それまでよりも情報の入力が速やかになったと思われる。文字の学習のみに拘泥するのではなく、手話や絵など、さまざまな情報とともに言葉を学ぶことで、より多くの入力がなされ、出力につながった。

#### 四 実践事例(3)

二〇二三年四月から現在まで担当しているダウン症の生徒Cは、中学部二年生である。小学校までは特別支援学級で学び、中学部から特別支援学校の在籍となった。全身の筋力が弱く、集中すると座位が崩れることがある。視力の差が左右で大きいためあつてか、書字の際に顔が傾くこともある。こつこつと努力できる人柄で、教員に言われたことを素直に受け入れて頑張ることができる。

Cは感受性が豊かで、表情や自分なりの言葉で発信することができる。しかし、障害の特性上、筋力が弱いからか、発音が不明瞭で、相手に伝わりにくいことがある。そこで、初めに体幹トレーニングに力を入れようと考えた。今年度から担任が変わり、信頼関係を作ることが最も大切だったので、ヨガを取り入れて、リラクゼーションや軽い雰囲気づくりに努めた。ヨガを取り入れたのは、全身の筋力の弱さを補おうと考えたからでもある。話すために用いる力として、口周りの筋力だけが注目されがちだが、微細な運動をするためには粗大な運動が必要である。つまり体幹を鍛えることが求められる。毎日、ヨガで楽しく体幹を鍛え、呼吸訓練用の吹き戻しを用いたり、舌の運動を行ったりすることで口周りの筋力も鍛える。その繰り返しによって、話すための力を育もうと考えた。加えて、発音のための筋力には閾値があると考えたことから、日常的によく使う単語は手話とともに発音する練習を開始した。

Cは文字や文を書いて表現することがとても上手である。しかし、正しい発音が難しかったためか、拗音や促音の記述を間違ったり、助詞が違ったりすることがある。間違ったときには教員が横に正しく書き、一緒に発音練習をする。訂正しすぎないことで、本人の自尊心を守ることを心掛けた。特に学校で書く一日の振り返りと、家庭で書いてくる日記により、毎日、練習することができた(資料①②)。

前述のヨガと口周りの筋力トレーニングを継続して行くと、唇を閉じ

	の	は	た		う	こ	一	き
	し	、	の		こ	と	ば	よ
	か	か	し		は	ん	が	う
	っ	ん	か		、	が	、	わ
	た	っ	っ		も	ん	ば	た
で	み	た	で		く	ば	た	し
す	を	こ	す		ひ	っ	た	し
。	た	と	。		と	た	が	が

資料①

ようとする意識、舌を動かそうとする意識、発声時の息遣いへの意識が変わってきた。そのため、だんだんと発音が聞き取りやすくなっていった。食事の際の姿勢も、正しいときに称賛することで、正しく保持できる時間が一〇分程度から二〇分程度にまで伸びた。また、手話を付けることで、他者に伝わりやすいという成功体験を積み、手話を積極的に使うようになってきた。そのことで、より多くの成功体験を積むことにつながった。

教員が一所懸命に、Cとコミュニケーションしたいという意思を示し続けた結果、彼女も心を開き、話がしたい、という意欲を見せるようになった。四月から始めて、七月の夏休み前には、自分の気持ちを自分か

9/12 今日、私が一番がんばったことは、作業でエプロンをしたことです。楽しかったです。たまたまは、体育で朝マラソンをしたことです。

9/13 今日、私が一番がんばったことは、体育で朝マラソンをしたことです。楽しかったです。たまたまは、音楽でつばさを反げしたことです。

9/18 今日、一番がんばったことは、体育で朝マラソンをしたことです。楽しかったです。たまたまは、国数で本を話しました。

9/20 今日、私が一番がんばったことは、体育で朝マラソンをしたことです。楽しかったです。たまたまは、ふりがえりをしたことです。

資料②

ら表現し、教員に伝えようとすることができるようになった（資料③）。  
 家庭の状況も、正しく教員に伝えられるようになった。  
 この事例では、担任との信頼関係を築いたうえで、各種の筋力トレーニングや手話に取り組み、正しい発音での入力が多くなされるようになった。もともと出力する能力も備えてはいたが、さらに好ましい発信が増えてきたのは、正しい情報の入力が増えたことが大きく関係すると考える。

私は、せきこのどがまてくていたけど、これからも人生をまてて、食べ物を一緒にほったました。  
 かしんじいぐるしーつらーいたの、少なくて回りました。  
 私はみや下先生をやるとして、みや下先生と私けとゆうたさん、くみからもアツカとイトト行きました。

みや下先生昔しころ



資料③



五 実践事例(4)

生徒Cとともに、二〇二三年四月から現在まで担当している生徒Dは、自閉スペクトラム症の男子、中学部二年生である。いつも笑顔で穏やかに生活しているが、以前に叱られたことや失敗したことを思い出すと、パニックになることがある。最も大きなパニックの際には「Dは一日しつこくなる！」と大きな声で三回ほど叫ぶ。四月当初はクールダウンに数分間を要したが、七月には三回ほど叫ぶことで気持ちを収められるようになった。父が技術者のためか、手先が非常に器用な生徒である。

四月に出会ったときには、一単語で自分の気持ちを訴えることが多かった。例えばお茶が飲みたいときには「お茶」とだけ言う。または、帽子を持っていきたい場合には「帽子」とのみ言う、というように。

Dは文字を書くことが得意である。定型文を毎日書き、それを読んで発表することで、効率よく言葉を入力できると考えたため、一日の振り返りを行うことに力を入れた。定型文を示し、空欄は自分で考えて書くように促した。するとすぐに書き方を学び、一か月ほどで、用紙ではなくノートに自分で書けるようになった。

初めは空欄に一単語だけを書いていたが(資料④)、次第に言葉を付け足すように促し、七月には自分で付け足すことができるようになってきた(資料⑤)。

また、Dが一単語で話そうとした際には、教員が、誰にでも分かりやすい文を教えることを毎日続けた。例えば、「バランスボール」とDが言ったときには、教員が「バランスボールを貸してください、と言いましょう。」と言うようにだ。すると一週間ほどで、Dは教員が言葉を教えてくれるのを待つようになった。そして教員が教えた文を数回、自分で繰り返し唱えて覚える、ということを行った。そうして自分から言える文が増えた。

Dが主に休憩時間に自由に発信した場合、私は必ずDの思いを受けと

	わ	楽	も	ん	今
	な	し	く	ば	日
	げ	か	ひ	っ	、
		っ	よ	た	私
		た	う	こ	が
で		こ	で	と	一
す		と	す	は	番
		は	。	、	が

資料④

今日、私が一番がんばったことは、おやこレクでポックをしたことです。楽しかったことは、自立です。

今日、私が一番がんばったことは、マラソンです。楽しかったことは、国数です。

資料⑤

めるようにした。発信を一方通行で終わらせず、私が返事をしたり復唱したりすることで、双方向のコミュニケーションになるよう努めた。Dの場合、言葉が増えるきっかけとなったのは、好きなアイドルの名前を活用して自分の考えを伝える会話ができるようになったことだ。好きなアイドルXは正解、逆に芸人Yは不正解、という文法を身に付けた。Xにはなりたいたければ、Yにはなりたくない、という理解から、他のことを表現する際に応用できるようになってきた。五月には「Yには、なりません。Xになりたいです。」と書いていたのが、六月には「Yさんは、かつこ悪い。Xはかつこいい。」と詳しくなり、「Xはポテトを食べます。」と、自分の欲求をXで表現することが増えてきた。さらに七月には「運転します(運転したいです)。トラクター(の)。車(の運転)は、事故(に遭うかもしれないから)、危ない。車(の運転は)、Yさん。」(内は筆者の補足)というように、車の運転は好ましくない、ということ、Yという名前前で表現するようになった。当然、好ましいことはXと表現する(資料⑥)。

その一方で、「〇〇みたい」という表現も育ってきた。五月に初めてパズルのピースを「恐竜みたい。」と言って以来、やはり別のピースを「バスマイ。」と発言。その後、七月には「赤いティラノサウルス、人間みたい。」と、色プラス動物プラス人間みたい、という語の組み合わせのパターンを、さまざまに自分で試す様子が見られるようになった。すべてが「人間みたい」で終わるのかと思いきや、「人間ちがう」という表現もあった。この場合にも毎回、私は「本当だ、恐竜みたいだね。Dさんは恐竜が好きですね。何恐竜に似ているかな？」などと言葉を付け足して答え、双方向コミュニケーションのよい機会とした。

資料⑥にみられるように、DもAと同様、初めは質問の形で教員とコミュニケーションを図ろうとした。興味深いのは、さまざまな教員に質問したい、と私に訴えるので、「では一緒に聞きに行きましょう。」と誘

うと、五月ごろは拒否することがあったことだ。そこから少しずつ、一度は拒否しても、私と一緒に聞きに行けるようになり、今では拒否せず、質問しに行けるようになった。これまでの失敗体験から、また失敗するのではないか、失敗したくないという思いがあり、拒否していたのだと考えている。それが、成功体験を積むことにより、自分の言葉に自信を持つことができるようになったのだろう。

多様なパターンを自分なりに試す様子が見られるようになり、他者に通じやすい言葉を手に入れたDは現在、コミュニケーションを楽しめるようになった。母の話では、近所で幼少からのDをよく知ってくれている郵便局員がDの話すのを聞き、「すごいなあ。」と成長を認めてくださったのだという。それを聞いたDは大変喜んだ、とうかがっている。

Dの事例では、人が言葉を学ぶ流れがよく分かる。一単語を発するところから始まり、次に質問の形式になる。そして形容詞、名詞、動詞の組み合わせを試して、他者に自分の気持ちを通じやすい表現を探る。

## 六 考察

以上の四例を通じて言えることは、生徒それぞれの伝えたい思いを的確に把握し、それぞれの課題に即した支援を日常的に繰り返し行うことが大切である、ということだ。Aの場合は、他者とのコミュニケーション欲求が満たされていなかった。何が言いたいのかということ、作文を通して把握し、適切な言葉で表現することで、場に応じたコミュニケーションができるようになった。Bは自分の氏名を文字で書くことをきっかけに、言葉と物の結びつきを意識できるようになり、そこから手話を通じた発信へと向かっていった。Cは発音が不明瞭で思いが伝わりにくかったところ、各種トレーニングを行い、同時に手話も学ぶことで、相手に伝わる経験を重ねて、コミュニケーションへの意欲が高まった。Dは、伝えたい思いはありながら、言葉にすることが難しかった。教員が

※表中（ ）内は宮下による補足

日付	ことば	日付	ことば
2023/4/21	素晴らしい！	2023/6/16	〇〇（キャラクター名）のお面を作ります。のり、ペン、紙、はさみをください。
2023/4/25	バランスボールを貸してください。	2023/6/19	（手洗い時に汗だくの宮下を見ながら静かに）宮下先生、暑い……
2023/4/25	仕上げ磨きをお願いします。	2023/6/20	お茶を飲みます。
2023/4/25	明後日、Dは休み。学校来ない。おうち。	2023/6/22	豆腐を少しだけ食べる。
2023/5/1	2024年4月。	2023/6/22	パズルをします。
2023/5/8	Cさん、無理しないでいいよ。	2023/6/23	子ども（は）嫌（です）。大人（になりたいです）。
2023/5/10	（パズルのピースが）恐竜みたい。	2023/6/27	Cさん、6年生のとき（の担任は）、〇〇先生。
2023/5/10	Yには、なりません。Xになりたいです。	2023/7/3	私はDです。お名前を教えてください。
2023/5/10	Xは車の運転ができる。Xは25歳。	2023/7/3	優しく編みます。
2023/5/20	タオルを靴に入れます。	2023/7/4	〇〇食べません。袋をください。
2023/5/20	（パズルのピースが）パスみたい。	2023/7/7	D、車、運転するよ。
2023/5/23	アラジンと魔法のランプ、ディズニーランド、人魚姫、3匹の子ぶた、ピノキオ、白雪姫。	2023/7/7	車、運転、事故、危ないから、しない。
2023/5/24	D、偉い！	2023/7/7	トラクターで〇〇駅、車、飛行機。
2023/5/25	宮下先生、薬（を飲んでください）	2023/7/7	ハイコース、運転できない、事故が危ない。
2023/5/25	大きなかぶ、英語、ピンギス（ピンキッツ）、スノーマン、タブレット。	2023/7/11	〇〇先生（男性）、お父さんみたい。宮下先生、お母さんみたい。
2023/5/25	〇〇先生のおうちは、何町ですか？	2023/7/12	今日は忘れた。明日は忘れない。エプロン。掃除。
2023/5/29	昼休み、2プレ、バランスボール、ピンキッツ、英語、大きなカブ、見たいです。タブレットを貸してください。	2023/7/12	高等部になったら、水筒、ブルーサイダー、X。メロンソーダ、Y。
2023/5/30	（Dより遅れて体操を始めた私たちに、自分からタイマーを差し出して）どうぞ。	2023/7/12	高等部、卒業、はたらきします。M（町）の〇〇（店名）、ピザ屋さん。
2023/5/31	（ピンキッツを見て笑いながら）宮下先生、見てください。	2023/7/12	運転します。トラクター。車は、事故、危ない。車、Yさん。
2023/6/1	3年生になって、ディズニーランド、ホテル、ベッド、シャワー、温泉。	2023/7/13	赤いティラノサウルス、人間みたい。緑のプテラノドン、人間みたい。紫のスピノサウルス、人間みたい。ピンクのフォンちゃん、人間みたい。オレンジのキツネ、人間ちがう。
2023/6/1	お茶づくりをします。	2023/7/14	高等部、卒業したら、働きます。
2023/6/9	2025年、D、高等部1年生、2026年高等部2年生、2027年高等部3年生……	2023/7/14	イオンモール〇〇、行きたい。
2023/6/14	Yさんは、かっこ悪い。Xは、かっこいい。	2023/7/18	明日は、D、学校休み。おうちでパンダのぬいぐるみと、ゆっくり遊ぶ。明後日は学校に行く。

資料⑥ Dの言葉メモ（抜粋）

授業という枠組みをこえて休み時間などにおけるDとの、たあいもない言葉のやり取りに付き合ひ、言葉を補ったり、付け足したりする中で、単語から文へと多彩な表現を身に付けた。

一般に、学校教育における言葉の教育というと、授業（主に国語科の授業）の中で語いを増やすとか、書ける文字を増やすことに集中してしまふ傾向にあるが、それに限らず、一人ひとりの日常の思いに寄り添った支援をすべきである。「読むこと」「話すこと」のように、発達段階に合わせて、何ができないのか、という観点で教育を計画してしまいがちであるが、それよりも、何が伝えたいのか、なぜ伝えられないのか、という、子どもの思いと、それを阻む問題に即して授業を組み立てるとよい、ということだ。思いに寄り添うことで、意欲と自信が生まれる。すべての例でそのことが実証された。そして、どの子もコミュニケーションを欲している、ということが明確になった。だからこそ、生徒たちは言葉の学習に対して非常に意欲的であり、意欲的だから伸びる。伸ばす際の支援において大切なのは、できる限り多くの言葉を入力することだ。生徒の得意なこと、好きなことを生かし、生徒に合った手段で入力する。出力するのに十分な言葉が入力されれば、生徒は自ら発信するようになる。そして成功体験を積み重ねると、称賛される喜びを味わうことができるので、さらに意欲的になり、また伸びる。教員は、このような前向きならせん構造を意図的に作り出すことが望ましい。

## 七 おわりに

ヒトは一人では生きられない。他者とともに生きるために最も必要なのがコミュニケーション、自分と他者との双方向のやりとりである。言葉は、無くても生きていけないわけではない。しかし、より豊かに幸福に、人間らしく生きるために、使える言葉は多い方がよい。

障害のある子どもたちと生活するなかで、私はこの子たちの言葉を理

解できるけれども、卒業した後に関わる方々も理解してくれるだろうか、という問題を常に抱えてきた。中学校を卒業すると、「言葉」や国語科の教育を受ける機会が激減してしまうのが現状である。ゆえに私は、義務教育の最後の三年間で、できる限り効率よく生徒に言葉を入力し、しかも出力できるようにしたい、と考え続けている。少しでも多くの方がその課題を解決する方向に向いていけたら、と思い、実践をまとめようと決意した。教員としての経歴が浅い私は、本稿で報告した活動を、一学年から三学年まで通して実践した経歴がない。二学年から三学年への二年間を通した指導を、一度しか経験できていないのだ。退職するまでに一度は、三年間を通した指導の経験を積んでみたい。もしそうした経験ができたなら、そのときには改めて実践記録をまとめようと考えている。

## 八 資料

- ① 生徒Cが書いた一日の振り返り（二〇二三年四月）
- ② 生徒Cが書いた一日の振り返り（二〇二三年七月）
- ③ 生徒Cが書いたメモ（二〇二三年七月）
- ④ 生徒Dが書いた一日の振り返り（二〇二三年四月）
- ⑤ 生徒Dが書いた一日の振り返り（二〇二三年七月）
- ⑥ 二〇二三年四月から七月に宮下が書き留めた、生徒Dの増えた言葉メモ（抜粋）

## 九 参考文献

- ・『知的障害特別支援学校の自立活動の指導』（二〇一八、全国特別支援学校知的障害教育校長会）
- ・『発達に合わせて伝える 子どものための食事マナー』（二〇二二、NPO法人みんなのお箸プロジェクト）

・「作文でことばを育てる」(二〇一二年、川崎市立中学校教育研究会 特別支援学級教育部会編『平成二三年度指導事例集』、宮下)